

ひがしひろしま 郷土史研究会ニュース

No.613

2025年9月

8月例会報告

8月例会は8月23日(土)、三ツ城地域センターで開催され、25人が参加した。

冒頭で赤木会長は「広島県は6月7月の平均気温が例年に比べ2.6℃高かった。とても大切な戦後80年の節目だが、合わせて私たちはこの地球が大きなターニングポイントに差し掛かっていることを意識しなくてはならない」と呼びかけた。

研究発表は伊原聡子氏による「白市と伊原家について」。

フランスと日本の2拠点生活を送りながら、NPO法人白市町家保存会の運営に携わる伊原氏。自身が生まれ育った伊原正三家が国登録有形文化財になった経緯や、白市の町並みの成り立ち、伊原家の成り立ち、周囲の町家との関係などをわかりやすく解説いただいた。

当郷土史研究会が管理を任されている文化財の一つ・旧木原家住宅のある白市について、改めて会員全員が知見を深められる例会となった。

7月例会発表

戦後80年を迎える日本

吉本 正就

■ 1. 志和での体験記

昭和20年(1945)8月6日は全校生徒による水泳訓練の日である。快晴で空は澄み切っていた。それは今から80年前の世界で初めての広島原爆投下惨劇の日である。

昭和16年3月国民学校令が公布され、尋常小学校は「西志和国民学校初等科」と改称されていた。私は初等科1年生で入学して4カ月、毎日「足並みをそろえて」と行進訓練などさせら

れていた。

学校の手前、駐在所の前に来た時、警戒警報のサイレンが大きく響き渡る。道路から駆け下りて畔道の陰に避難する。まもなくの解除で学校へ急ぐ。

●警戒警報について

私の家から西に海軍山が見える。通称「海軍山」は正式には「中野村見張所」で「中野村」とは敵をあざむく偽名である。この見張り所から敵機の襲来情報が司令部に流されて警戒警報が発令されるのである。B-29が空域に入ると警戒警報が発令され、海軍山から高射砲が発射されるがB-29の高度の半分程度までしかとどかない。その状況が手に取るように家から見える。この頃警戒警報は1日に何回も発令され、あまり緊張はない。

朝礼点呼を済ませ出発、小野池の近く松林まで来た時、またもや我々の真上にB-29が見えた。警戒警報は発令されていない。そのB-29が急旋回(急上昇したように見えた)と同時に木陰全域に閃光が走った。

しばらくすると轟音が聞こえてくる。西の空に大きな赤黒い入道雲の様な雲が立ち上がってきた。青空にくっきりと湧き上がる。その雲の横、青空に落下傘3個が我々の真上に見えてきた。

「敵兵が降りてくる全員シャツを脱いで裸になれ!!」と先生が叫ぶ。(白シャツは目立つから)「高等小学校の生徒は1年生を背負ってそれぞれに隠れろ!」しばらくすると落下傘は方向を変えていった。(可部に落下した)

その後轟音は鳴り続け、煙は大きくなっていった。おそらく瀬野方面に爆弾が落ちたのだろうということでその場の事態は納まった。訓練が行われ、われわれ1年生は宝さがしのゲームであった。水泳が終わり、校長先生の話。

「皆さん、今見えるものすごい煙と轟音は何だと思いますか」

「はい、先生あれは新型大型爆弾だと思います」

「何を言う、皆さんが見た、あのB-29を日本軍が撃ち落とし数機が大炎上していると思われる」

9月臨地研修のご案内

日時	9月27日(土) 8:30～
集合	鏡山公園第2駐車場
内容	三原市仏通寺、米山寺など
バス代	1,500円

なんとなく浮かぬ気持ちで家に帰る。家に帰っても何が起きたか情報はない。

祖父母がいない。「叔父が怪我をして顔中血だらけで榎ノ山を帰っている」と連絡をうけ、車力（大八車）を曳き、むかえに行っていた。父（教員）は学校にいたが召集令状（賀北部隊・小隊長）が来て急遽出征する。

●祖父の「決して日本軍は勝てない」

祖父は日露戦争の時期、アメリカの大陸横断鉄道建設の仕事（出稼ぎ）をしていた。サンフランシスコの日本領事館から兵隊検査の出頭命令、身体検査の結果は不合格（身長が足りなかったか）であった。兵役を免れ、5年程、鉄道工事に携わる。

この間、アメリカの国力や差別（日本人をジャップと呼ぶ）を、身をもって体験することになる。

日本に帰って結婚、5人の子供を育てる。百姓でありながら、教育が大事と子供を師範学校に行かせた。

太平洋戦争が始まると「アメリカには勝てない」という。外向きには言えない状況である。次男が満州医大に合格するも、日本は戦争に負けるので、満州は危険であるといい、行かせなかった。

アメリカでの体験談を子供には話していないが孫の私には多くの事を話してくれた。

●父のうなされ続けた半生

父・政吉は夜中、田舎の大きな母屋全体に響き渡る大声で「うおー」「うわー」のうめき声を発するのである。それはたびたびのことであった。うめきが続くと母が「おとうちゃん」と声を掛け起こして鎮まるのである。

その時期は、私が小学校3年生頃からであろうか、お父さんが怖い夢をみたのだろうと思っていた。

しかし、そのうめき声は35歳頃から90歳で死ぬまで続いたのである。その魘（うな）された要因は何か、誰も尋ねることなく、本人もそれを最後まで語ることはなかった。だが、家族は想像がついていたのである。

◎救援活動（父は小学校の教員で兵隊検査は甲種合格であった）

8月6日の原爆投下後、召集令状を受け取り、その日に賀茂郡北部防衛隊（略称、賀北部隊・救援隊）・高和中隊小隊長として組織編制が始まる。先発隊は当日夕方には広島に入ったという。工月隊・高和隊と随時、広島に入り救援活動を行った。

この世では想像できない現場を体験する。首のない死体、内臓が出て、僅かに呼吸をしている人。

最初、本格的に活動したのは広島城の堀であった。

◎現場で「びんた」を食らった話

堀の水面が見えないほどの死体の山であった。水面から竹竿で死体を引き上げていた。向こうの方に将校らしき兵隊がいたのは気づいていたが、こちらは一生懸命作業をしていた。

すると後ろの方で大きな声で「キサマ！！」と声がした。振り向くと平手打ちのびんたが飛んできた。「キサマのような兵隊では日本は負けるぞ」と怒鳴る。

「わしゃア教員じゃ」堀の中へ背負い投げで（柔道5段）投げ飛ばそうかと…そうか数日前に召集令状で小隊長に任命されていたか…残念…キサマはわしに敬礼もできないのかということか？…

◎死体の処理・焼却

救援活動をしていると、息絶え絶えの負傷者が駆け込んでくる。「兵隊さん助けてくれ」と言って倒れ込む。焼け残った倉庫の様なところにむしろを敷き寝かせる。すると「兵隊さん、この仇は必ずとってくれ」と手を握りしめる。わかった、わかったと言って寝かせる。

口が利けるものは、住所・名前を聞き取り、荷札に記入し親指に取り付けて置く。朝になると、ほとんどが死亡している。

木材の上に並べて焼却する。荷札のあるものは、荷札と遺骨を箱に入れ保管した。

この時、死亡する人の最後の言葉は手を握り「兵隊さん、是非仇をとってくれ、たのむ！！」と日本の勝利を信じて逝ったのである。

◎司令長官に呼び出される

死体の処理・焼却が続く熱い毎日であった。その、ある日（8月12日）、司令部から呼び出しがあった。長官室に入ると白頭巾（頭をかなり火傷したとみられる）を巻いた長官がいた。呼び出された理由は、市民からの死体の処理、扱いの苦情であった。死んでいても人間だから、もう少し丁寧に扱ってほしいということであった。

「毎日暑い中ご苦労です」と言って、扇子（東条英機書の日ノ丸と他）2本（現在も保管している）を手渡してくれた。

その司令官は8月15日（玉音放送）後自決したと後に知ることになる。

◎放射能の後遺症と戦犯

救援活動中は放射能の認識がないので火傷をした馬・豚・鶏などを食べた。帰ってしばらくして頭の髪が抜けはじめたが困るほどではなかった。隊員の中には1週間で体調を悪くし、帰省し死亡した人もいた。

終戦後戦犯に処せられ公職停止となる。現在の農協の仕事をしばらくしていたが、教職に復帰した。

■ 2. 広島市への爆弾投下(焼夷弾)の記録

(広島原爆戦災誌より)

広島市に比べ呉市や福山市、松山市、今治市など周辺の市には8月6日までに大規模な空襲が続いていた。

5月16日には広島には爆弾禁止命令が出され、原爆投下(8月6日)まで都市機能を温存させる作戦であった。

・投下目標本命の広島はアーノルドらが、長崎はルメイやチベッツらが選定した。

広島は数回の選定委員会で常に第1目標に挙げられていた。

その理由は

◎広島市には大きな軍需工場はないが陸軍の主要な兵站地、陸軍第2総軍と中国軍管区の司令部や陸軍船舶司令部がある軍事都市である。

◎人口多く30万人。

◎近くに捕虜収容所がなかった。

◎広島は日本に戦意喪失を生じさせる効果が期待できる最良の軍民両用の適地である。

・一方、マッカーサー元帥(陸軍西太平洋方面軍)は、日本本土上陸作戦を計画していた。

原爆は投下直前までマッカーサー元帥らには知らされていなかった。

●広島原爆投下の日(アメリカ陸軍航空軍史より)

・1945年8月6日、投下目標、第1は広島、第2は小倉、第3は長崎、新潟は距離があるので外された。3都市が曇っていれば爆弾は持ち帰ることになっていた。

・午前5時20分、エノラ・ゲイ号は硫黄島の上空を通過。

・午前6時15分、気象状況受信

第1目標の広島と第3目標の長崎は良好。

第2目標の小倉は不良…広島運命が決まる。

・エノラ・ゲイ号は午前8時15分、爆弾投下

●長崎原爆投下の詳細

・1945年8月11日、2発目の投下を予定してい

た。

・8月11日は日本列島に悪天候が予想されていたため原爆の投下日を8月9日に繰り上げた。

・午前1時30分、原爆搭載機と観測機2機計3機が離陸した。

・8時過ぎ、気象観測機は小倉と長崎は曇りと知らせた。

・45分間巡回後の9時頃2機で小倉に向かった。小倉で3回の照準点を探したが見つけることが出来ず、第2の目標の長崎に投下を決めた。午前10時58分、上空で曇の穴を見つけ、原爆を投下した。

・1945年8月14日、日本はポツダム宣言を受け入れ無条件降伏した。

●神風の再来

日本の戦争指導者は兵隊を精神論で鼓舞し降伏を認めなかった。国民には一億勤労奉仕を誘導し、学校では生徒に神社で「神風再来」をお祈りさせたという。

原爆投下後も日本の各地には空襲が続き、その犠牲者の総数は甚大。

原爆が広島、長崎に落とされ、一度に多くの人が犠牲になった。

この2発の原爆投下が日本の戦争指導者たちに降伏を決断させたと断言できる。

■ 3. 戦争責任と戦後責任を考える

(令和7年5月25日、中国新聞)

戦後80年となる今年、戦争体験者が激減し、戦禍の記憶が遠のく中、私たちは「戦争」をどう捉え直したらいいのか。気鋭の歴史学者、宇田川幸大(中央大学准教授)の資料より

1、開戦責任や被害を生じさせたことを問う戦争責任は、主に戦争体験者が担うものです。戦争や暴力の加害や被害を再び生じさせないようにするのが戦後責任で、全世代が担うものです。
2、問題の原因をさかのぼって明らかにする歴史的思考が大切です。アジア太平洋戦争は総力戦でしたから、軍人だけではなくメディアや民衆を含めて国全体が戦争を担いました。戦争の担い手たちがそれぞれどのような形で戦争に関わったのか検証し戦争の原因や防止策を考えます。

3、戦争の起点は、満州事変から敗戦までの15年の戦争と考えることが主流でしたが、日清戦争以降の大日本帝国による戦争と植民地支配の全体を問う視点が必要です。日本は日清、日露、第1次世界大戦と戦争を続けましたが、戦争責

任は政治的にも社会的にもまともな検証がなされていません。

4、日本の戦争責任を裁いたのが極東国際軍事裁判（東京裁判）でした。戦争犯罪を可視化したもので、意義があります。ただ課題も残りました。追及を担った欧米諸国も裁かれた日本も帝国主義国家でした。そのため戦争の根本原因である帝国主義という考え方そのものや植民地支配にはメスが入らず、アジアの被害が無視、軽視されました。

対象も陸軍が中心で海軍や外務省の責任追及はおろそかになり、財政・経済専門家の責任もきちんと問われていません。外交や財政は戦争を支えるうえで欠かせません。戦争は軍人だけで進められないのです。

5、軍勢力や軍事同盟によって相手を屈服させるのは時代遅れの考え方です。日独伊三国同盟のように軍事同盟はむしろ衝突を誘発するというのが歴史の教訓です。第一次大戦や第二次大戦はその典型です。

6、私たちの責任は戦前、戦中よりもずっと重いと言えます。選挙で国会議員を選ぶことで、政治の方向性を根底から左右できるからです。

第9回昔の道探訪会

吉田 泰義

令和7年7月16日(水)9:30から「東広島の紙芝居本の編集会議」として高屋町白市交流会館に集合。参加者一同は編集委員として下記の活動をすることを決定した。



■編集会議決定事項

その1 紙芝居10編程度約140ページ。

・福成寺縁起・菖蒲前伝説・西条がきの歴史・幸熊丸伝説・槌山合戦物語・鏡山合戦物語・東広島の西国街道・木原秀三郎と神機隊・宇都宮黙林・江木鰐水・高屋の白市物語

その2 書式は横書き段組は1段、文字サイズ16ポイント、冊子のサイズはB5、印刷はオー

ルカラー。

その3 印刷部数は200～300部、価格は3,000円を目安に印刷会社と交渉。

その4 完成目標は2026年4月、編集会議は毎月開催する予定。

その5 紙芝居 寺家の幸熊丸霊界伝説三国伝記の解説。

■幸熊丸伝説が掲載されている「三国伝記(さんごくでんき)」とは



室町時代の説話集。12巻。編者は沙弥玄棟とするが伝未詳。応永14年(1407)以後、文安3年(1446)以前の成立。インド・中国・日本3国の説話を輪番に配列し、各巻30話、全360話を収める。1日1話で1年12ヵ月、360日に配したものか。応永14年8月17日の夜、天竺の僧梵語坊、大明の俗漢字郎、本朝近江の遁世者和阿弥が京都の清水寺に来会し、月の出を待ちながら梵、漢、和の順に各自の国の話を披露するという趣向で、《大鏡》《宝物集(ほうぶつしゅう)》以来の伝統的構想を踏まえながら、直接には《太平記》巻三十五の北野通夜物語に想を得ている。文体は駢儷(べんれい)的美文を随所に交じえた漢文訓読臭の強い漢字片仮名交じり文で、編者の漢詩文的素養をうかがわせる。内容は釈迦伝以下の僧伝、寺社縁起、仏法僧の靈驗感應譚など、3国の仏教説話を主体とするが、中国・日本説話には歴史故事や和歌説話など世俗的話題も少なくない。総じて文献に取材したものが多く、和漢の仏書や説話集が有力な典拠となっているが、なかには編者の伝聞にもとづくものもあったようで、他書に見えない興味深い説話も散見する。15世紀前半の時点で前代的説話を選択集成した一大説話集として、中世説話文学の掉尾を飾る代表作。後代文学への影響も見のがせないものがある。執筆者：今野達

出典 株式会社平凡社『改訂新版 世界大百科事典』

安芸津・榊山八幡神社の絵馬 2

今田 幸博

《神楽殿の絵馬》

■ 5. 児島高德図(こじまたかのりず)



縦：94.5cm×横：66.9cm

鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて活躍したとされる武将で、元弘元年（1331）の元弘の乱以降、後醍醐天皇に対して忠勤を励み、南北朝分裂後も一貫して南朝側に仕えた。

画の左上に、児島高德が隠岐に流される後醍醐天皇の、院庄（岡山県津山市）の行在所に忍び、自分の志を示すため庭の桜の幹を削り刻んだ「天莫空勾踐 時非無范蠡」の漢詩が記されている。

明治22年（1889）己丑4月吉祥日に、鑑喜一正敏、西山謙吾庸暢、柄福泰重治、青木八二閔徳壽が奉納。

【言葉の解説】

＊書き下し文：「天（てん）勾踐（こうせん）を空（むな）しゅうすること莫（なか）れ 時に范蠡（はんれい）無（な）きにしも非（あら）ず」

＊大意：「天は呉との戦いに敗れ捕らわれた越王・勾踐を見捨てなかったように先帝を見捨てることもありません」

■ 6. 八岐大蛇退治図(やまたのおろちたいじず)



縦：106.3cm×横：82.7cm

「古事記」に、八岐大蛇は頭と尾がそれぞれ八つあり、その長さは八つの谷、八つの尾根にまたがり、体には苔や杉・檜が生え、腹にはいつも血が滴っているとあり、高天原を追われて出雲に天降った素戔鳴尊が、大蛇に酒を飲ませ酔ったところを十拳剣で退治し、食い殺されるはずだった奇稻田姫を助ける。また切り裂いた尾から出た剣が三種の神器の一つの草薙剣で、その剣を天照大神に献じたと言う神話を題材にしたもの。

画は、素戔鳴尊が十拳剣で八岐大蛇を退治する場面を描く。

明治13年（1880）庚辰5月穀日に、西山照一、高橋一郎が奉納。

【言葉の解説】

＊穀日（こくじつ）：良い日・吉日

＊十拳剣（とつかのつるぎ）：日本神話に登場する剣の総称。

■ 7. 楠木父子(くすのきふし)桜井(さくらい)の別れ図(わかれず)



縦：98.8cm×横：75.0cm

楠木正成は、南北朝時代に活躍した武将で、後醍醐天皇の命を奉じて兵を起し延元元年／建武3年（1336）足利尊氏と神戸の湊川で戦い戦死した。

画は、古典文学「太平記」の名場面のひとつで、戦場に赴く正成が嫡子正行と桜井の駅で対面し、今生の別れを告げた場面を描く。

銘文に判読できない箇所があり、「安芸津風土記」7号を参考に読んでみると、「安政6年（1859）己未沽洗吉祥日に、水戸屋伝□□□が奉納。」

【言葉の解説】

＊沽洗（こせん）：弥生の異名・3月のこと。

■ 8. 芝居絵図(しばいえず)



縦：88.7cm×横：74.5cm

画は、二人の男役者を描く。

明治8年(1875)乙亥超夏上浣日に、南平八、三浦嘉六が奉納。

【言葉の解説】

*超夏(ちょうか)：夏で最も暑い7月か8月のことか？

■ 9. 鰻網大漁図(ぼらあみたいりょうず)



縦：48.9cm×横：71.0cm

画は、右側に鰻漁の画を、左側に漁の船団の概要等を記す。

この絵馬は、大正15年(1926)旧3月10日網初めに鰻漁の大漁を祈願して奉納されたものと思われる。画の先頭の船に「和霊大王」と記された旗が建てられている。

【言葉の解説】

*鰻(ぼら)：ボラ目・ボラ科に分類される魚の一種。ほぼ全世界の熱帯・温帯地域に広く分布する大形魚で、海辺では身近な魚の一つ。

*和霊大王(われいだいおう)：産業の神として、漁業を中心に幅広く信仰されている。

■ 10. 大倭日高見国地神集会之図(おおやまとひたかみのくにちじんしゅうかいのず)



縦：100.8cm×横：131.8cm

画は、地神五柱を、中央に元祖「天照大神(あまてらすおおみかみ)」、右上に二代目「勝速日天忍耳尊(かちはやひあめのおしほみのみこと)」、左上に、三代目「天津彦彦火瓊瓊杵尊(あまつひこひこほのくにぎのみこと)」、左下に、四代目「彦火火出見尊(ひこほほでみのみこと)」、右下に「彦波瀲武鸕茅草葺不合尊(ひこなぎさたけうかやふきあえずのみこと)」を描く。

明治17年(1884)甲申4月下浣に柏迫鶴吉、安富兼平、佐藤徳七、吉井信吉、福島常造、境三助、石川市太郎、平野才吉が奉納。

【言葉の解説】

*地神五代(ちじんごだい)：天神七代に続き、神武天皇以前に日本を治めた五柱の神の時代。

*大倭日高見国(おおやまとひたかみのくに)：日本神話における大和国の美称。

太陽が高く輝く国＝日本国の美称。

*下浣(かかん)：月の20日以降のこと。下旬。

■ 11. 鐘馗図(しょうきず)



縦：180.6cm×横：135.6cm

中国の民間伝承に伝わる道教系の神で、奈良時代に中国から伝わった端午の節句の風習と共

にやって来た魔除けの神で、疱瘡除や学業成就にも功があるとされる。鐘馗の図像は、魔除けの効験があるとされ、旗、屏風、掛け軸として飾られる。画は、勇壮な鐘馗の姿を描く。

明治5年(1872) 壬申春3月穀日に、荒谷口、柄八郎右衛門重俊、荒谷口口郎、二百惣四郎が奉納。

■12. 騎馬武者奮戦図(きばむしゃふんせんず)



縦：114.0cm×横：189.2cm

画は、騎馬武者二人が戦う姿を描く。

左側の武者は「弓」を、右側の武者は「長槍」を持っている。

明治2年(1869) 己巳3月吉日に奉納されている。

額縁の下部に、奉納者15～18名の名前が記されているが、判読不明。

■13. 武者之図(むしゃのず)



縦：141.8cm×横：89.0cm

画は、薙刀を片手に鎧姿の凛々しい武者を描く。

明治8年(1875) 乙亥暮春穀日<紀元2535年>に奉納、額縁の下部に、奉納者22名(欽治郎、多吉、口治郎、仲造、庫平、尚次郎、與助、徳治、兵十、芳治郎、重郎、音吉、三六、定八、弁助、伊作、初吉、嘉平、善作、要助、長作、伴蔵)の名前が記されている。

画内に、「公副雅人 寫」と記されており、画工である。

【言葉の解説】

*暮春(ぼしゅん)：春の終り・旧暦(陰暦)の3月のこと。

春(しゅん)＝春のこと。

■14. 自然木額(しぜんぼくがく)



縦：141.8cm×横：89.0cm

額に、自然木を貼り付けている。

弘化4年(1847) 丁未孟春吉辰に、榊山武右衛門が奉納。

【言葉の解説】

*孟春(もうしゅん)：春の初め・初春・旧暦(陰暦)の正月のこと。

孟(もう)＝初めの意。

*吉辰(きつたつ)：良い日・吉日。

■15. 弁慶と牛若丸図



縦：150.5cm×横：122.0cm

画は剥落が著しいが、「安芸津風土記」7号では「弁慶と牛若丸図」として紹介されており、よく見ると中央の大きな武者が「弁慶」(長刀と衣服の家紋<宝輪紋>で判断した)で、左側に描かれているのが「牛若丸(源義経)」である。

元治2年(1865) 乙丑夏4月上浣日に、高橋玉之輔、井原亀蔵が奉納。

■ 16. 鰯敷網漁図(ぼらしきあみりょうず)



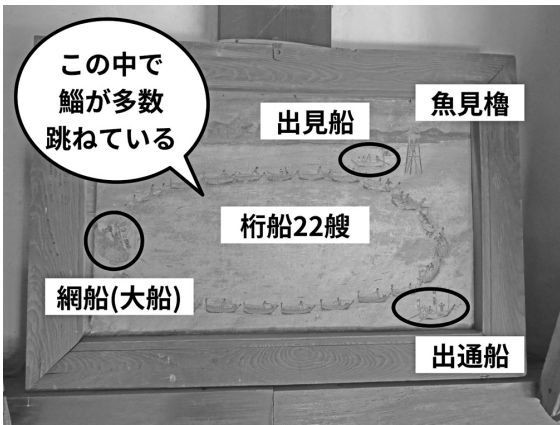
縦：54.0cm×横：79.0cm

画は、「鰯敷網漁」の方法を油絵で描いている。額縁に銘文が記されている。大部分は判読不明であるが、右側の額縁に

「明治四拾貳年六月拾貳日 網元荒谷超松 大舟船長山下□□・・・」と記されており、判読不明の部分には船団の構成員の名前が記されていたと思われる。

明治42年（1909）6月12日に、網元以下船団構成員が奉納。

「鰯敷網漁（ぼらしきあみりょう）」について



鰯敷網漁 模式図

網船1艘、桁船22艘、出通船1艘、出見船1艘の25艘を以って一統となす。

鰯敷網漁は海底に網を入れ、23艘の船がU字型に配置して魚が来るのを待つ。魚見は三名で、常に櫓の上で魚が来るのを見張り、魚が来ると櫓より声を掛ける。魚が桁口より四、五番目の所に来た時、山から合図をして一番から網をめる。網をめるとO型になる。魚が居れば必ず一、二番の所へ出る。魚が居れば各船毎に網を手操る、するとUの形になる。鰯を各船思い思いに魚をかくす。最後に大船が中に入り鰯を探して大船に投げ込む。中に千尾居れば各船十本を貰う。それとかくし鰯とが日当で、ほかに十日毎に米一斗ずつ飯米として貰う。網船を大船と

云い、22艘を桁船と云い、魚見を山見と云う。

漁期は、旧三月初旬より五月初旬頃までの約六十日間。

「安芸津風土記」第1号（昭和45年）所収（つづく）

【新規会員募集中】

活動が気になる方は、下記 QR コードから覗いてみてください。



Instagram



HP



Facebook

グループ研究会ご案内

第299回 古文書研究会

と き 9月9日(火) 13:30～
ところ 市役所北館 市民協働センター
テキスト 国郡志御用ニ付下弾帳賀茂郡冠村②

第196回 石造物研究会

と き 9月23日(火) 13:30～
ところ 市役所北館 市民協働センター
内 容 今後の活動計画について

第196回 四日市町並研究会

と き 9月8日(月) 13:30～
ところ 西条本町歴史広場 小島屋土蔵
内 容 本通り商店街の話

昔の道探訪会（旧山城探訪会）

と き 9月24日(水) 9:30～
ところ 三原市三原駅構内集合
内 容 三原市歴史民俗資料館など

原爆資料保存研究会

と き 9月18日(木) 14:30～16:00
ところ 市役所北館 市民協働センター

9月の図書室開放

と き 9月19日(金) 13:00～15:00
ところ 高屋教育集会所

ひがしひろしま郷土史研究会ニュース 第613号

令和7年（2025）9月5日発行
編集・発行 東広島郷土史研究会

会 長 赤木達男

事務局長 國松宏史

会報編集 進藤真由美

～